

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24730725

研究課題名(和文) 社会科のカリキュラム設計力育成に向けた教師教育の改善：米国のシステムに学ぶ

研究課題名(英文) Renovation of Teachers Education for Social Studies Curriculum makers

研究代表者

渡部 竜也 (Watanabe, Tatsuya)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：10401449

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円、(間接経費) 390,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、当初以下の課題に取り組む予定であった。(1) 社会科教師の力量の再定義 (2) 健全なゲートキーパーの育成法の考察(3) 健全なゲートキーパーの実態調査(4) 健全なゲートキーパーを支援するための公的カリキュラムの研究
(1)(2)については、日本カリキュラム学会で成果報告をしている。(3)については当初は国際比較を計画していたが、十分にできなかった。その分、国内の教師に重点を当てて調査した。(4)については、米国NCSSカリキュラムに注目して調査中である。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is (1) clarifying the definition of competency of social studies teachers, (2) thinking what is teachers as rational gatekeepers, (3) researching good curricular-instructional gatekeepers in Japan, (4) thinking good formal curriculum for teachers as rational gatekeepers

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学(教科教育学)

キーワード：教師教育 社会科教育 ゲートキーピング

1. 研究開始当初の背景

合衆国では、ナショナル・スタンダードの作成に見られるように、政治権力が教師のカリキュラムや授業に介入する度合いが増している。これに合わせて、教師はこうしたスタンダードの還元者として位置付けようとする動きすらある。だが、これとは反対に、こうしたスタンダードとうまく付き合いながら、主体的なカリキュラムと授業の調節者として教師の役割を再定義しようという動きもみられる。

これはわが国にも当てはまる話ではないだろうか。本研究は、こうした合衆国での議論を踏まえて、社会科教師の力量の再定義を行い、同時にその能力を育成するための手立てを考察すること(またその効果を実証すること)を目指した研究である。

2. 研究の目的

本研究は、教師の社会科カリキュラム設計力の育成に向けて、そのシステムおよび教育方法論の構築を目指す。

3. 研究の方法

前述の目的を達成するために、次のようなアプローチを採用する。

(1) 社会科教師の力量の再定義

S. ソートン氏の「教師のゲートキーピング論」に着目し、社会科教師の力量について再定義を行う。基本的には、教師を公的カリキュラムの従順な実行者とするのではなく、教師は公的カリキュラムを利用しながらも、これをしたたかに読み替えたり、応用したりしていく主体的な形成者の存在と位置づける(=ゲートキーパーとしての教師)。

(2) 健全なゲートキーパーの育成法の考察

こうした教師の主体性は、良い面と悪い面がある。教師はつまらない公的カリキュラムの改善者になりうることもあれば、よき公的カリキュラムの破壊者に転じる可能性もあるからだ。そこで、健全なカリキュラムの育成者を育成するためには、何が必要となるのか、日本と合衆国の社会科教育学者たちの議論を踏まえて考察してみる。ここで注目するのは、日本では池野範男の教科教育学構想や草原和博の教科教育実践学構想、そしてショーマンやグロスマンのPCK論、そしてソートンの影響を受けたレヴスティクとバートンの構想である。

(3) 健全なゲートキーパーの実態調査

健全なゲートキーピングができていない教師の下に訪問して、その実態調査や聞き取り調査を行う。基本的には、独自カリキュラムを開発できた教師に着目していく。そしてその教師たちが他の教師とどの点に違いがあるのかを考察する。

(4) 健全なゲートキーパーを支援するための公的カリキュラムの研究

ソートン氏は先の全米社会科教育学会(NCSS)のカリキュラム・スタンダード作成委員会に加わり、これの作成に尽力した。このカリキュラム・スタンダードは、教師が公的カリキュラムを健全な形で読み替えるための示唆を与える指標のような存在である。この構造について、解析する。

なお本研究の進行に当たっては、広島大学の草原和博先生、鹿児島大学の田口紘子先生、岐阜大学の田中伸先生にもご協力を得た。

4. 研究成果

このうち、(3)は、国内の教師しか調査することが出来なかった。当初、外国の「つて」として期待していたインディアナ大学ココモ校の小川正人氏が、日本に帰国し、立命館アジア太平洋大学に移動したことが、その理由としては大きい。また、(2)の研究に、大きな時間が割かれたことも、その一因にある。ただ、今後も合衆国内での教師への訪問調査は行いたいと考えており、(3)の成果をまとめるのは、そのあとに行う予定である。

なお国内では、沖縄で独自の政治教育プログラムを作り出した政治学者島袋氏と、それを補佐した琉球大学の院生に訪問踏査した。また仙台でグローバルな社会認識を英語の授業の中で行っていけるように独自のカリキュラムを作り上げた高校教師にもインタビューを行っている。これらの人々に共通するのは、学習指導要領とは別の、大きなあるべき教育目標(人間形成の目標)を持っているという点である。強い目標や目的へのこだわりが、健全なるゲートキーパーとしての教師になるには必要となると結論付けることができる。これは合衆国での近年の議論とも一致する。

(1)については、社会科教師を「ゲートキーパーとしての教師」と定義することは、特に国家が社会認識を画一化したものとしようと圧力をかけてくる領土問題のようなテーマにおいて、大きな対抗力(民主主義のための調整力)を発揮することを、『"国境・国土・領土"を、なぜ・どのように教えるか』(明治図書、2014年度出版予定)で確認した。

(2)については、ソートン氏のゲートキーピングの考え方を引き継ぎ、教師教育の在り方について論じたバートン氏とレヴスティク氏の著書 Teaching History for Common Good に注目し、その翻訳を進めるとともに、『コモン・グッドのための歴史教育』のタイトルで、春風社から2014年冬に出版予定)彼らの理論とPCK理論やわが国の教科教育学(教科教育実践学)構想との比較考察を進め、その成果について、昨年の日本カリキュラム学会で報告した。

まず PCK 論や池野氏の教科教育学構想は、教科を学科領域と同一視する学科内容優先主義の傾向がある。これらの立場は、まずもって学科内容を教えることが上位にあり、そのため学科領域（地理、歴史、公民）の枠組みや学科内容の系統性を保持しようとする。その上で、各領域での市民性教育を構想する。「室町時代」を教えることは自明のこととして、その中で市民性育成に向けて何ができるのかを考えるという方式を採用する。

対して、草原氏の教科教育実践学構想やバートンらの構想は、市民性の各種要素を総合的に育成しようとする総合教育に対して、市民性育成の各種要素を分業的・一点集中的に育成することを目指すのを教科教育と考える。つまり各教科は、学科内容と同じではなく、市民性育成の目的の違いによって存在すると考える。そして社会科は、多元主義的な参加民主主義国家・社会の形成者の育成を目的とする教育と位置づけられる。学科内容が優先されるのではなく、人間形成の目標が優先される。目的を達成するために、どのような内容と方法を、いつごろ必要とするのか、考察していくことを重視する。「室町時代」を教えることは、自明とされない。

また、日本型臨床的授業研究法（レッスン・スタディ）、つまり1時間単位の授業での子供たちと教師のやり取りの記録を踏まえながら、授業参観者たちと実践者が授業の在り方について議論していくやり方について、その意義とともに限界性についても強く意識している点も、両者の特徴である。多元主義的な参加民主主義国家・社会の形成者の育成のために、単元や授業はどうあるべきかと根源から問い考えるには、レッスン・スタディは不向きであると両者とも考えているのである。

ただ、草原氏の場合、研究において具体的なカリキュラムや授業構想を描くことが重視される分、それらの効果について、具体的な実証的なデータを必要としない哲学的アプローチにその特色がある。バートンらは実証データを重視する分、あまり具体的な授業構想を研究者が議論することに慎重である。

PCK 論や池野氏の構想は、学科内容が多元主義的な参加民主主義国家・社会の形成者の育成という目的より優先される危険がある。社会科という教科の本質をより生かしている構想は、草原氏やバートン氏らのものとなるだろう。ただ、この両者の考え方にも一長一短ある。その使い分けが必要になる。これについては今後の検討課題としたい。

(4)については、NCSS カリキュラム・スタンダードが「逆向き設計」論などを取り入れたものであること、教師の「実際に行っているカリキュラム(enacted curriculum)」の改善を目指すものであること、各州の公的カリキュラム(内容カリキュラム)の読み替え装置として期待されていることなどを分析

から明らかにしてきたが、まだその構造について完全な説明ができる段階にまで研究成果をもってくることはできなかった。継続調査から、本年度中に(4)についても成果をまとめたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

渡部竜也、草原和博、田中伸、田口紘子、「なぜあなたはその内容をその方法で教えるのか」と問うところから始める教師教育論、日本カリキュラム学会第24回大会自由研究発表(上越教育大学学校教育学部) 2013年7月6日。

〔図書〕(計2件)

草原和博、渡部竜也、明治図書、「国境・国土・領土」を、なぜ・どのように教えるか、2014年度出版予定

K・バートン、L・レヴスティク著(渡部竜也、草原和博、田中伸、田口紘子訳) 春風社、コモン・グッドのための歴史教育、2014年出版予定

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
特になし

6. 研究組織

(1)研究代表者

渡部 竜也(東京学芸大学)

研究者番号：10401449

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：